

江戸近郊における松浦河内守信正の足跡

—新(再)発見の史資料—

加藤 健

はじめに

長崎歴史文化博物館の長崎奉行所正門の入口に、松浦河内守信正奉納の石燈籠竿石部分が建っている。博物館建設に伴う事前発掘調査で出土したものである。博物館のパネル展示に『上司にしたい長崎奉行は？—歴史に名を残した長崎奉行—』として十人の人物が取り上げられているが、その中に信正は「経済通のらつ腕奉行」として紹介されている。

常設展示の「長崎会所」の現代的な解説における検索で、「特別企画百年のあゆみ」↓「面白エピソード」を読むと、一七五三(宝暦三)年の信正閉門に関連する「用行組事件」が出て来る。

近年、長崎奉行を追究されている鈴木康子氏は、「松浦河内守の改革を調べるほどに、この名奉行が失脚させられ、現在に至ってもその業績が顧みられないことが残念でならなかった」(思文閣出版『長崎奉行の研究』)と評価しておられる。

以上のように、松浦信正は知名度がある奉行といつて良いだろう。ところが、意外にも江戸近郊における動向が知られていない。そこで、今回は関連史資料の一端を紹介することにした。

松浦信正の出自・経歴



松浦信正坐像(木像)

松浦氏は中世武士団として活動をした松浦党の系譜で、江戸時代の平戸藩主の分家である。松浦氏宗家である相神浦松浦氏を継承した系統は、松浦猪右衛門信貞(一六〇八〜九四、平戸藩主松浦鎮信「天祥」の従弟)が肥前国松浦郡今福村に(現・松浦市)千五百石を分知され、旗本に取り立てられた。信貞は一六六六(寛文六)年に勘定頭(後の勘定奉行)になるが、武蔵国葛飾

郡下小合村(現・東京都葛飾区)・上篠崎村・谷河内村(現・同江戸川区)で千五百石加増され、合計三千石の知行取となる。一六八二(天和二)年に家督を信方に譲るが、この際に弟・市左衛門(信正)に七百石、勘助(信吉)に四百石、八兵衛(信勝)に四百石を武蔵国葛飾郡で分知した。この中の八兵衛が信正の祖である。

『徳川実紀第九篇や『寛政重修諸家譜』第八などによると、松浦信正は一六九五(元禄八)年に市左衛門(信正)の三男として出生、別家松浦信守の養子となり、書院番・西城徒頭・駿府町奉行・大坂町奉行等を歴任。一七四六(延享三)年に勘定奉行に就任、一七四八(寛延元)年に長崎奉行も兼任となった。一七五二(宝暦二)年に長崎奉行の任は解かれるが、「長崎掛」として新職の奉行と諸事任務するよう命じられる。しかし、翌年二月、豊後国の貢米の不納の件、長崎の制度について相違の報告などを理由に、勘定奉行を解任され、閉門となるも半年後、許される。一七六九(明和六)年七四歳で死去、下小合村の龍藏寺に葬られる。

勘定奉行兼長崎奉行としての長崎改革の推進、信正閉門の関連とされる「用行組事件」等については、前出の鈴木氏の著書が詳しい。

瑞正寺(葛飾区東金町五―四六―五 HPあり)

松浦信正は勘定奉行解任後、知行地の下小合村に隠棲したといわれる。当時、この地にあった龍藏寺は廃絶に近い状態にあったが、信正は再興して信正院とも称されるようになり、一七五七(宝暦七)年には同寺のために梵鐘を寄進し、現在でも「松浦の鐘」(東金町五―五―五地先)と呼ばれて残っている。龍藏寺は明治維新の際に廃寺となった(墓所は後に葛飾区青戸八―十九―七の宝持院に移転)。

廃仏毀釈の際、領民が信仰対象を散失させてはいけないとして、信正の遺品を近くの瑞正寺に納め、供養し、地元の人々からは火難・盗難・

厄除けの観音として信仰され、第二次世界大戦の際も、この地域一帯が被災しなかつたので、より一層信仰を集めた。

瑞正寺の主な所蔵は次の通りである。

○十一面観世音菩薩像(火伏せ観音)：信正の守本尊として篤く信仰していたと伝えられる。非開帳。

○松浦信正坐像(木像)と位牌

○松浦信正母長松院画像

これからも検討しなくてはいけないが、かつての知行地において松浦信正が信仰の対象として現在まで続いている事実は重要であろう。

引き継がれなかった研究成果

龍藏寺は廃寺後に瑞正寺に移されたことは、『葛飾区史』(昭和十一年刊)に書かれている。また、一九七〇年代に行われた区教育委員会の寺院調査報告にも、「十一面観世音菩薩像」が記述されている。松浦信正坐像は写真で紹介されている。にもかかわらず、地域の歴史関連の書籍では、「松浦の鐘」と「信正の墓」だけの記述にとどまったのは不可解である。今回、改めての発見となった。信正母画像は新たな発見であろう。

おわりに

信正の他の知行地にある妙泉寺(江戸川区谷河内一―六―十二、HPあり)には、「松浦信正画像」と「松浦信正奉納写経塔」がある。特に、信正画像と瑞正寺の信正母画像は、同じ加藤文麗(泰都、伊予国大洲藩主系譜の旗本、一七〇六〜八二)の画によるものである。まだまだ史資料発見の可能性は十分にある。長崎市・平戸市・葛飾区・江戸川区など関連する地域の足跡を交流する必要性を感じる。

(東京都立石神井高等学校教諭)

風信

○チリならびに奄美大島の大災害、一日も早く復興される事、心よりお祈り申し上げます。

○十月二十三日奈良平城遷都千三百年記念をかね正倉院展第六十二回開会式のご案内状を戴く。本会を代表し竹之下憲一郎氏に御出席を戴いた。同

二十七日、水曜懇話会の時、同展覧会の目録と法隆寺の柿を持参され同展の報告があり、一同感激して聞き入った。

○同日録を御覧になりたい方は事務局において下さい。

○十月開催された「二〇一〇年日本のうた」ごえ祭典in長崎 三千人の参加者があり大成功でした。」と運営委員長の田中実先生が大会終了報告のため来訪された。一同大よろこびでした。

○十一月三日文化の日。色々と文化行事あり出席、我れ我れの時代には「明治節」と言いましたね。

○旧暦の十月最初の亥ノ日は(今年は十一月九日)平安時代より「イノ子餅をつき食すれば病なし」と言い、宮中にも此の行事があったと記してある。現在はあまり此の行事はないようです。

○十一月十五日は「七五三の祝い」とある。古書に「三才の男女はじめて髪を結び(項髪)、七才の男女はじめて袴をつく、女子は之の日、着物の付紐をはずし帯を着す。」とある。三、五、七の数ほめてたいと記してある。一六〇三年長崎イエズス会編集の「日ボ辞書」に「Xichigosan no furumai盛大な宴会、この時七膳または三膳がおかれ、一膳に七種、一膳に五種、他の二膳に三種の料理あり」と記してある。長崎でも此の日は大宴会があったのでしょうか。

○十一月二十三日新嘗祭とある。日記には「宮中にて十月卯の日(旧暦)新嘗祭として天皇新穀を神前に供され、のち自らも召しあがる。五節の舞あり」とある。明治時代この「卯の日」を十一月二十三日と定め、現在は「勤労感謝の日」となっています。

○十二月、年末ですね。そして十二月七日は大雪、翌八日の朝は私達にとっては思い出の多い日なのです。

○今月は次の御本を御寄贈いただきました。

○今月は次の御本を御寄贈いただきました。

講談社より『ナガサキインサイトガイド 長崎を知る 七七のキーワード』本紙編集について岡本一宣氏を中心に坂井恵子・小川寿子さん等・長崎ゆかりの人達の執筆あり。長崎の新辞典として大いに参考になった。(定価二、〇〇〇円)

○長崎国際文化協会より『長崎文化』特集・長崎のいま「新らしい長崎学の方角が記してあり大いに勉強になった。(希望者は国際文化協会まで)

○富山市発刊の「北日本新聞」に長崎県バドミントン協会大東良平氏の記事あり驚いた。

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二―一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F

